世界の問題解決と「未来のスキル」を考える

渡辺 登

現在の勤務校等
新潟県長岡市立才津小学校

在外での勤務校／帰国年月
ロンドン日本人学校／ 2013 年帰国

ロンドン日本人学校勤務時にチャリティーやフェアトレードの取り組みに接したこと、JICA 教師海外研修でエルサルバドルの JICA 専門家の活動を知ったことから、国際理解教育とキャリア教育を組み合わせたプログラムを考案。国際的な社会問題を自分のこととして捉え、その解決のために自分に何ができるかを考え、そのために必要な未来のスキルに結び付ける。小６社会科「国際貢献」の単元学習として毎年実施している。

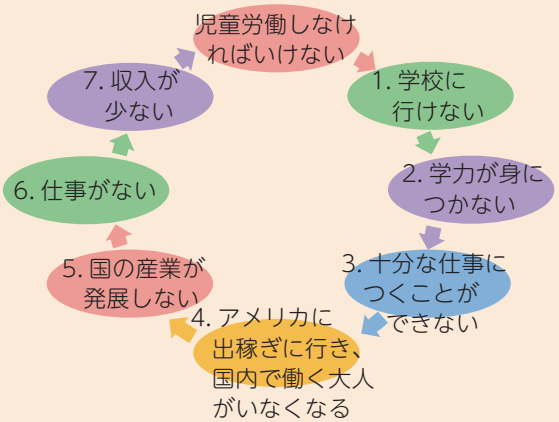
実践・活動の内容

小学６年生社会科「世界の人々とともに生きる」の単元の学習において、国際的な社会問題の解決に自分の「未来のスキル」を結び付けて考えることで、グローバル化する国際社会に生きる資質を養うことを目指した実践である。

まず、国際問題を自分ごととして捉えるために、ワークショップ「文字が読めないということ」を行った。ネパール語で「薬」「水」「毒」と書いた３本のペットボトルを用意して水を入れ、「薬」には少量の砂糖を、「毒」には少量の塩を混ぜた。その中から、児童に「薬」のボトルを選ばせた。児童たちは、文字が読めないということは、薬と毒の区別がつかないことを意味し、それはすなわち生命の危険があるのだと気づいた。

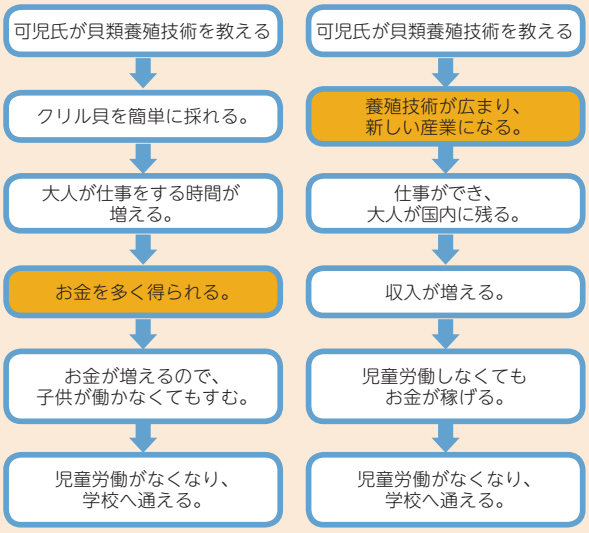
次に児童労働問題の題材を提示して説明した。文字が読めないことによる不利益や危険について、児童の意見を聞く。「文字が読めないと苦労が大きい。学校は必要だ。」「どうして子どもが学校に行けないのか」との感想をもつ児童が多い。

ここで「児童労働　負の連鎖図」（図版）を示した。



負の連鎖図

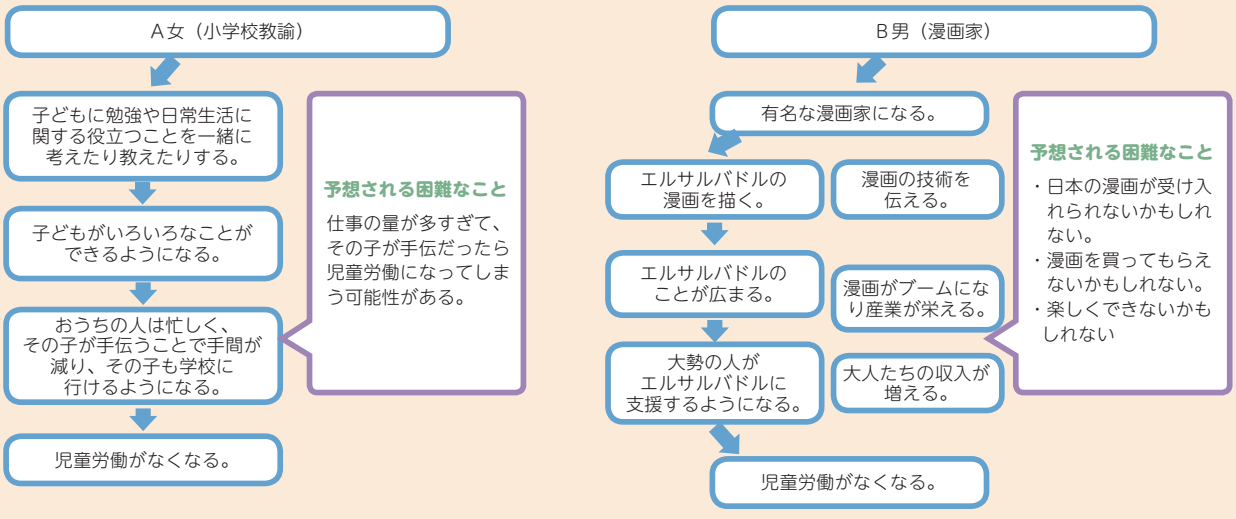
これは JICA エルサルバドル支部から提供を受けたもので、この連鎖のどこかを切ることができたら児童労働解消につながる。このことを児童に伝え、さらに、具体例としてエルサルバドルの JICA 専門家可児清隆さんによる貝類養殖技術の普及活動を教えた。可児氏は貝類養殖によって連鎖図の６と７を断ち切り、児童労働解消を目指している。



JICA 可児氏児童労働解消までのステップチャート

このほかに防災教育ボランティア石田夏樹さんの活動や ODA 資金援助による牛乳精製施設建設などの例を挙げ、児童労働解消までのステップチャートを児童が各自で作成して表現方法を習熟し、同時に開発途上国支援には様々な方法があることを学んだ。

最後に、自分が将来なりたい職業を選び、その仕事で社会問題をどのように解決するかを考えてステップチャートを描いた。自分の将来が世界の社会問題解決につながると考えることは、社会問題を自分ごととして捉えることになる。自分が国際社会で果たすべき役割について考えた。



「未来のスキル」による児童労働解消までのステップチャート

評価と課題

本プログラムを発表した研究会では、国際理解教育とキャリア教育の連携を図った点で高い評価を受けた。小６の段階で、将来の自分の職業が国際援助に結び付くということに気づいた子どもたちの実際のキャリア選択につながる取り組みであったと感じている。

子どもたちの反応の具体例を紹介する。

児童Ａは教員になる夢を持っており、文字のワークショップを通して教育の重要性を再認識したものの、当初は児童労働解消との直接の関連を見いだせずにいたが、実践後に次のように述べている。

「最初、私が選んだ小学校教育のスキルと「児童労働がなくなる」にあまり繋がりが分からなかったけれど、みんなで考えて、「お金を寄付する」「世界に広める」とか、新しいワードが出てきて、こうすれば児童労働がなくなるんだと納得することができた。」

漫画家になる夢を持つ児童Ｂは、最初は児童労働問題を他人事のように捉えていた。しかし社会問題を広報することも支援になること、広報活動で漫画のスキルが活かせることに気づき、「人の役に立ちたい」と、自分にできることを見出した。

児童Ｃは、普段は授業に特別な配慮を必要としており、勉強に取り組むことが苦手だったが、この授業中に図書館司書になりたいと言い出し、「良い本を子どもたちに紹介し、学校を好きになってもらう。そして、児童労働を解消させたい」という強い願いを持つに至った。Ｃが自分の意思を表すことは滅多にないことで、Ｃには良い学習の機会であった。教員としても、大きな手ごたえを感じた。

児童Ｄは、「有名なカメラマンになり、世界の状況を伝える」と発言。卒業後に学校を訪ねて、念願のカメラを手に入れて夢に向かって進んでいることを報告してくれた。

それまで自分だけのものだった将来の夢や計画に、「人の役に立つ」という視点が入ってくる。それによって児童は自分と社会との関係を強く意識することになるし、同時にそれは子どもの持つ夢を肯定することにもなる。特に、ステップチャートの使用は、未来のスキルと児童労働問題という社会問題を結びつけるにはとても有効だった。

いずれ活動内容を精査して教材化し、教員が手軽にこの実践に取り組めるように整備したいと考えている。

実践に至った経緯と提言

公立小の総合的な学習の時間でアマゾンに木を植える活動などに取り組んできたが、自分自身はずっと海外勤務の経験はなかった。いつか在外校勤務をしたい、国内校での自分の経験はきっと日本人学校の子どもたちの役に立つと思っていたが、念願かなって 2010 年にロンドン日本人学校に赴任。全校 430 名程度、小学生は１学年２クラスで、小１と小３を２回担任した。児童は多様で、日本語も英語も十分に育っていないダブルリミテッドの子どももいた。校務として、小３～中学生が使う学校発行の社会科副読本のリニューアルにかかわり、全職員で取材活動を分担して１年半がかりで取りまとめた。

趣味のトライアスロンなどを通して、現地のチャリティー活動の様子を目の当たりにし、文化としてチャリティー活動が根付いていることが分かった。チャリティーマラソンやチャリティートライアスロンなどのイベントに参加した際、人々がボランティアで大会を

運営したり、選手を応援したりする姿や、参加する際にチャリティー団体にお金を寄付するなどの姿を見て、ここでは支援したり支え合うことがごく当たり前なのだと感じた。日本では「良いものを安く」で生産者保護の概念がなかなか深まらず、チャリティやフェアトレードが偽善と揶揄されがちだが、英国ではすでにチャリティーやフェアトレードは当然のことで、普通の暮らしにそれらが根付いていることが驚きだった。地球市民として活動することが当然であるという英国人の考え方に触れ、私も、個々の能力をグローバル社会のなかでで生かすにはどうしたらよいのか、その態度を養うには何が必要か考えるようになった。

帰国後に着任した小学校では担任を離れて教務主任になり、小６の社会科を担当していた。学級担任ではないので、文房具や衣類を集めるなどの国際協力活動はしにくい。自分の担当時間内で何ができるかと考えて、「国際貢献」の単元学習に、国際理解教育とキャリア教育を組み合わせることを考えた。2014 年に JICA 東京主催の教師海外研修に参加し、中米エルサルバドルで JICA 専門家として活躍する可児清隆さんの活躍を取材し、これが本実践のメイン教材のひとつになっている。

担任は持っていなかったが、毎年小６社会科を担当していたので本実践を繰り返すことができ、内容の改善にもつながった。現在は教頭になって小６社会科からも外れているが、毎年５時間はこの取り組みに充てている。

このほか、長岡市・ホノルル市姉妹都市交流プログラムの引率教員として、市内の中学生を連れてホノルルを訪問している。真珠湾攻撃時の連合艦隊司令長官山本五十六は長岡の出身であり、長岡市は米軍の空襲被害を受けているので、両者の間には感情のわだかまりがある。しかしそれを乗り越えようと、2014 年頃から花火の交流などがはじまっていて、人々の平和に対する思いが結実しつつある。真珠湾のミュージアムには山本五十六の展示があり、彼が日米開戦に反対していたことも説明されていた。

この姉妹都市交流プログラムには、小学校時代に「未来のスキル」授業を受けていた児童のふたりが中学生になって参加した。航空機製造の技術者になるという夢を持つ彼らは実際にホノルルを訪れ、平和大使としての学びを深めてきたが、私がその引率役をつとめられたことは嬉しかった。

この姉妹都市提携を活かして、平和をテーマにした学習プログラムをつくりたいと考えている。

学校外では、新潟県国際理解教育研究会に所属して、国際理解教育に携わってきた。現在は研修部長と NPO RING（新潟県国際教育研究会）の企画委員をつとめている。コロナ禍にあっても、ロシア、韓国、ベトナムの講師を招き、３度の国際理解教育セミナーをオンラインで開催した。また、秋季研修会は、在外教育施設に勤務中の教員も参加できるよう、初めて完全オンラインとして開催した。

帰国教員は、海外経験を活かそうと意欲を持つ人と、海外経験をできれば隠しておきたいという人に二分される。「外国帰り」として反発を受けることもある。それらが、帰国教員が埋没してしまう理由になっていると思う。

富山市では、帰任した教員を市のホームページで公開し、現場の教員から直接問い合わせや講演依頼ができるシステムがあるそうだ。自分から「やりますよ」「教えますよ」「知っていますよ」とは言いにくくても、こうして帰国教員に公的に役割を与えれば活用の道は

開ける。このシステムをぜひ新潟にも導入したいと考えている。

ロンドン日本人学校勤務は、私の学びの場を広げてくれた。これから派遣される教員の志望動機はそれぞれ違うと思うが、プロとして頑張ろうという心構えを持ってやってほしい。そうすれば得るものはとても大きいと思う。

ロンドンの経験は、その後の JICA 教師海外研修を経て授業実践につながった。しかし、海外経験だけで、学習をつくることはできない。私が今、海外経験を活かせているのは、経験の上に学びを続けてきたからではないかと思う。

日本人は、今、内向きになっていると言われている。しかし、世界は知らないとわからない。教え子たちには「さまざまな機会を生かし、一度は海外へ行ってみて欲しい」と話している。いつかは飛び出してほしいと願いながら、日々、小学生に種まきをしている。